

戦争体験の継承をめぐって

— 「良識と正義の呼び声」 —

宋 吉 慶 (本文執筆)
坂 部 晶 子 (翻訳・解題)¹

1. 中日両国における戦争体験の継承——解題として

戦後60年以上が経過した。ここ10年ほどのあいだ、「戦後補償」や「戦争の記憶」といった議論がマスメディアをにぎわせ、さまざまな立場からの議論が行われてきた。当事者が存命のうちに体験を聞きとっておかなくてはいけないという要請も強い。いっぽうで、こうした議論の担い手となるのは、当事者世代からそれ以降の世代へと移り変わってきている。それは、戦争体験の継承という問題が、当事者世代が伝えるという局面から、それ以降の世代がどのように受けとめるのか、何を継承するのかという局面へと変容しつつあることを示しているのではないだろうか。

日本国内での戦争体験の継承をめぐっては、「ひめゆり平和祈念資料館」における沖縄戦の証言や、広島における原爆体験の語り部などの広く知られた取り組みだけでなく、各地ですでに長期間にわたってさまざまな活動が行われてきている。証言者たちが自らの戦争体験を語る時、そこでは、当該社会の文化的・社会的コンテクストへの何らかの働きかけを含んで行われている²。当然そうした戦争体験の証言や記憶とは、その時々時代の背景や社会状況との相互関係や、共同体や国家の歴史叙述との相関、共同、対立、批判といったさまざまな関連を見つけだすこともできるだろう。戦争の記憶をめぐる分析の多くが、こうした問題構成のうで行われていると考えられる。

本稿で取りあげてみたいのは、日中戦争の体験の継承についてである。日本と中国とのあいだで「歴史認識」の差異が問題化されて久しいが、その遠因の一つとして、戦争体験の検討と継承が、日中双方の社会と文化的背景のなかでそれぞれのかたちで行われてきたということがある。たとえば、国際関係の分野から中国研究をすすめてきた宇野重昭は、日中間の「文化、思想、精神のありかたの問題」について、以下のように指摘する。

1 本稿は、宋吉慶著「良知と正義の呼喚」の翻訳に、坂部晶子による論文の解題（第1節）と訳注を付け加えたものである。宋吉慶の経歴については、注6を参照。

2 たとえば、「ヒロシマの記憶」について分析したヨネヤマの論文（ヨネヤマ 1996）など。

日本人の価値観からいうならば、日本の犯した罪は限定的なものであるべきであり、その罪はここ30年来の努力によって実質的に補われたと多数の人々は意識している。さらに日本人の価値意識においては、罪を犯しても、その罪を犯した人をいつまでも糾弾すべきではないと思っている。（中略）

他方、中国の人にとっては、日本はどこまでも侵略戦争を行い、残虐行為をおこなった罪の歴史を忘れるべきではないということになる。それも自らが顧みて反省すべきであり、罪をおかした人は自己批判しつづけることに意味があるということになる（宇野 2007：58）。

双方の国家の歴史叙述とも絡むこの戦争体験の検討が、数十年間にわたり相互に比較的独立したコンテクストのなかで行われてきたことは、たとえば中国の日本思想史研究者である孫歌も指摘している（孫 2002：247）。いっぽう、1980年代以降、日本と中国との一般の往来が比較的容易になるにつれ、日本から中国への観光客も増加していく。そのなかには、旧日本軍関係者たちが「亡き戦友」の慰霊・遺骨収集のために中国国内のかつての戦地を訪れる、あるいは「満洲国」時代に当地に暮らした人々が、自らの住居の跡地や学校などを訪れるといった事態も含まれ、かつての侵略者が数十年を隔てて被害を被った地域の人々と「出会う」という局面も見られるようになっていく³。こうした場面で、日本人観光客や慰霊・墓参団が、戦後日本社会における戦争体験の語りのコンテクストをそのままもち込むとすれば、現地中国社会とのあいだで衝突や軋轢が生じることとなる⁴。

こうした戦後日本という空間、ことに80年代の「時代の気分」を「多幸症（ユーホリア）」と呼び、感情がこわばり、他者への共感力や想像力の貧しい時代の文化のなかで、ごく少数の罪の自覚とともに生きてきた人びとの肖像をとおして、過去の戦争体験を否認し、罪の意識を抑圧する社会・文化を描き出したのが、精神医学研究者である野田正彰の『戦争と罪責』（1998）である。この本では、戦後日本社会のなかで、多くは孤独のうちに自らの戦争中の残虐行為と向きあい、それぞれのかたちで罪の意識を抱えてきた人びとの語り分析される。本書は、こうした人びとの姿勢をとおして、「多幸症」的な戦後日本社会の言説空間を逆照射するという構成になっている。そのあとがきは、「53年目の敗戦記念日を前にして、6年にわたる私の研究は一区切りを迎える。この後、中国での翻訳が進むことになっている。本書の問題提起が日本の戦後世代に届き、さらに中国、東南アジア、太平洋地域の若い世代との対話の糸口になってほしいと、心から願っている」（野田

3 たとえば、旧日本軍関係者の慰霊・遺骨収集にともなう現地社会との衝突にかんしては、伊香（2003）など。かつての「満洲国」居住者の現地訪問については、坂部（1999）を参照。

4 戦争の是非を棚上げにした日本からの慰霊・墓参団と現地中国社会との軋轢については、伊香（2003）が詳しい。

1998 : 359) と結ばれている。本稿で取りあげるのは、まさに『戦争と罪責』の中国語訳に触発された中国現地からの返答ともいえるものである。『戦争と罪責』のなかで触れられている、父親の戦争体験の内実を掘り起こし、それを加害の戦争体験として継承しようとする日本の戦後世代の女性について、中国の現地社会がどのように受けとめたのかということを示す、戦争体験の継承にかんする一つのケーススタディといえるだろう。

本稿は、本論にあたる第2節から第4節を宋吉慶が執筆し、導入部分の第1節と全体にわたる注（訳注）、および第2節から第4節の翻訳を坂部晶子が担当している。宋吉慶は、黒龍江省の南東、ロシアとの国境の街である東寧県文物管理所の所長を務めた経験をもつ。東寧県は、20世紀初頭、ロシアによる東清鉄道敷設にともない開発されていった街である。その後、「満洲国」時代には、「満洲国」とソ連との国境の街として、日本陸軍が主体となり対ソ防衛のための巨大な地下要塞が建設される。要塞施設にかんしては、もともと国境沿いの険しい地形につくられており、1949年以降新中国の時代になると若干の施設が軍事的に利用されるだけで、大部分は放置されたという。こうした施設が再び注目を集めるのは、1990年代に行われた戦争遺跡としての要塞にたいする学術調査がきっかけであった⁵。宋吉慶は、東寧県において、この要塞施設の発掘・保存・管理および当時の労働者たちへの聞きとりの中心となった責任者である⁶。

2. 倉橋綾子さんとの出会い

中日両国は地理上では一衣帯水の隣国であり、二千年以上も前から友好交流の歴史を有している。中国文化はかつて日本に深い影響を与えてきた。しかしながら、明治維新以降の近代の日本は、中国およびアジア諸国にたいする一連の侵略・拡張的な「大陸政策」をその基本的国策としてきた。1931年、日本の軍国主義は「九一八」事変（満洲事変）を画策、

5 「満洲国」時代、ソ満国境につくられた要塞群は、東寧県だけでなく、虎頭、瑯琿、黒河、海拉爾など14カ所あったという。要塞建設とその発掘にかんしては、菊地・関東軍国境要塞遺跡研究会（2001）が詳しい。また東寧県における要塞施設の発掘にともなう記念化のプロセスについては、坂部（2007）、高・王・韓・宋（2002）、宋・卒・孫（2005）を参照。

6 宋吉慶は、1953年、黒龍江省東寧県生まれ。1971年から84年、東寧県東寧映画館で働く。84年から87年、黒龍江広播電視大学で学ぶ。87年から96年、東寧映画館の副支配人、支配人をつとめる。96年から2009年にかけて東寧県文物管理所所長をつとめる。文物管理所は、2002年、黒龍江省文物保護工作の先進単位に認定され、また2007年には全国の文物保護先進県に認定される。宋吉慶の業務上の主な業績として、「東寧要塞群遺址檔案」、「東寧勞工墳遺址檔案」、「遺跡調査、勞工、慰安婦、見証人、重大活動等照片、影音資料檔案」の整理、「東寧要塞群遺址保護規劃」、「五排山城址保護規劃」の作成がある。主要共著に、『東寧要塞』（黒龍江人民出版社、2002年）、『東寧要塞陣地群』（黒龍江人民出版社、2005年）等があり、その他『東北淪陷史研究』、『中国文物報』、『北方文物』等の雑誌にも十数編の論文がある。

発動し、中国侵略戦争を開始した。これにより、中国およびアジアの被侵略国の人民は、さらに日本の人民もまた、尽きることのない被害をこうむってきたのである。戦争終結後においても、戦争の影と恐怖はずっと人びとの心にまわりついている。平和を愛する人びとは、平和のために、戦争の根本原因と罪の責任の追求を開始した。こうしたなかには被害国の人びとだけでなく、良識ある日本人も少なくない。わたしが出会った倉橋綾子さんもその一人である。

ここ数年、日本の中国侵略戦争問題にかんする調査に携わってきたため、中国侵略戦争問題についての国内外の多くの専門家や学者と知りあうこととなった。そのなかには専門の研究者もいるが、アマチュアの調査研究者もいくらかいる。彼らは苦労を厭わず、多くの精力と労力をつぎ込んで、黙々と聞きとり調査や著述を行っている。

6年前、綏芬河にいる周艾民先生⁷が『戦争罪責』という一冊の本を送ってくれた。サブタイトルには「ある日本人研究者による中国侵略戦争に参加した兵士たちの社会調査」とあった⁸。この本は、日本の著名な精神医学研究者である野田正彰教授の著書である。彼は数多くの深刻な事例にたいして調査を行い、人間性が奥深くまでねじ曲げられたような経験ののち、その行為と気持ちに変化が生じている個々人を、心理学的な深層から描き出してみせた。これらの分析をとおして、わたしはこの兵士たちが、戦後、自身の死に臨んで、彼らの人間性の深部において変化し、懺悔を行っていることを知った。

そのなかの「父の残した紙片から」⁹という一節は、とくにわたしの関心を引きつけた。そこで述べられているのは次のようなシーンだ。倉橋綾子さんという娘が、末期の食道癌である父親を看護しているとき、父は命が尽きる最後になって、点滴の針がさされていない右手で枕の下からしわくちゃになった紙切れをとりだし、ふるえる声でこういう。「おい、俺が死んだらこれを墓に彫りつけてくれや。なあ、頼んだぞ」¹⁰。娘は紙切れを受けとると、そこにはゆがんだ文字が書かれており、父が力をふりしぼって記したのがみてとれた。

7 中国、黒龍江省綏芬河市在住の地方史家。編著に『“東方馬其諾防線”大揭秘——侵華日軍偽滿洲国境要塞群実録』（中央編訳出版社、2004年）など。

8 野田正彰の著書『戦争と罪責』（岩波書店、1998年）の中国語訳。『戦争と罪責』の後書きでも触れられているが、本書は中国語に翻訳され、『戦争罪責——一個日本学者關於侵華戦争士兵的社会調査』（野田正彰著、朱春立・劉燕訳、広西師範大学出版社、2000年）として出版されている。本稿での大沢雄吉さんの事跡および倉橋綾子さんにかんする日本国内での記述は、多くは本書の記述をもとにしていることをお断りしておく。

9 『戦争と罪責』第15章「父の戦争」のなかの一節（野田 1998：305-309）。

10 ここでの父の言葉と次の紙片に記された言葉は、前出の『戦争と罪責』（野田 1998：305）およびここで登場する娘である倉橋綾子さん自身が記した『憲兵だった父の遺したもの』（倉橋 2002：11-12）の双方に記述がある。両者は内容としてはほぼ同一と考えられるが、表記法等が若干異なっている。ここでは、倉橋（2002）にしたがって訳出した。

旧軍隊勤務 12 年 8 ヶ月。

其間十年、在中国陸軍下級幹部（元憲兵准尉）として、天津、北京、山西省、臨汾、運城、旧満州、東寧などの憲兵隊に勤務。侵略戦争に参加。

中国人民に対してなしたる行為は申し訳なく、只管お詫び申し上げます（倉橋 2002: 11-12）

この突然渡された紙切れによって、倉橋さんはずっと尊敬してきた父にたいして疑念をもつようになった。父は中国で戦争にいていたあいだ、結局のところ何をしていたのだろうか。なぜ父は自分の人生の最後を、侵略戦争の参加にたいする謝罪を示すことで終わろうとしたのだろうか。かつて父がそのことについて話すのを聞いたことはなかった。さまざまな困惑のなかで、父が戦争に参加したという過去について彼女は困難な調査を始めたのである。

ある日本の憲兵の娘が、自分の父親の名誉とはいえない戦争経験にたいして調査を行い、さらに中国の被害を受けた人びとにたいして謝っている。彼女を突き動かしている力はいったい何だろうか、このことがわたしの関心を引いた。彼女は、ここ東寧まで来たことはあるのだろうか。わたしは、大沢雄吉さんの懺悔と倉橋綾子さんの調査と謝罪を知り、敬意を感じずるようになった。彼らは、この数年間の調査をとおしてわたしが出会った日本の友人のなかでも、侵略戦争問題への考え方とその態度にもっとも好感がもてるように感じられたのだ。この文章を読んでから、大沢雄吉さん、倉橋綾子さんという名前は、わたしの記憶のなかに深く刻まれることになった。

世の中には、それだけで孤立して存在しているものはない。あるとき、東寧県における「慰安婦問題」についてインタビュー調査を行うため、東寧県在住の「慰安婦」被害者である李光子さんに話を聞いていると、彼女は問わず語りに、二年ほど前、ある調査グループがインタビューにやってきたという話をした¹¹。そのなかには中年の日本人女性が一人おり、李さんに日本の憲兵の服装をした軍人の写真を見せたという。李さんから聞いたその時の様子は以下のものであった。李さんには写真の人物が誰かは分からなかったが、憲兵の軍服を見ておぞ気をふるった。日本人女性は、「わたしはこの憲兵の娘です。父に代わって、みなさんに謝りにきたのです」といった。李さんは、「わたしは彼女が憲兵の娘だと聞いたとたん、激怒したんだ。憲兵の娘が、恥知らずにも何しに来たんだってね」という¹²。一人の憲兵の写真は、老人の心の内にかくされた溢れんばかりの怒りに火をつけたといえよう。60年以上昔のあの虐げられ、蹂躪されつくした慰安所での生活が、一つ一つ目の前に浮かんできたのではないか。李さんは、大きな石が自分の心を押しつぶしているかの

11 倉橋綾子さんご本人によれば、ここでの調査グループとは、ジャーナリストの班忠儀さんと同行した倉橋さんのことである。

ように、ずっとこの巨大な精神的圧迫に耐えてきたのである。今日、この写真を見たことで、心の奥底に押し込めてきた60年間の怒りが、まるで火山の爆発のようにいっぺんに噴出してきたと考えられる¹³。

この60年あまりを経過した後の謝罪は、老人の許しを得ることはできなかった。李さんは「わたしは彼女を許していない」という。李さんによれば、「日本の国もひどく頑なだ。どうして公開の場で謝罪し、わたしたちの心と身体を傷つけてきたことにたいして賠償を行うことができないのか」という思いがあった¹⁴。

わたしは李さんに、中年の日本人女性の名前や日本の住所を尋ねてみたが、覚えていなかった。

わたしは李さんの話を聞いて、とっさにこの日本人女性はあの『戦争罪責』に記された倉橋綾子さんではないのかと考えた。李さんへのインタビュー以降、わたしはあちこちで、この父に替わり謝罪をしにきたという日本人女性のことを尋ねまわるようになった。

もう一つの機会があった。東寧県在住のもう一人の「慰安婦」被害者であった池桂蘭さんにインタビューをしていたときである¹⁵。彼女の娘である蘇さんが、わたしに一つの手がかりを与えてくれた。彼女の家には、2000年に中韓日のメンバーからなる民間の調査団体が残していったコピー資料があるというのである。そこには、確か、日本の憲兵の写

12 倉橋綾子さんが李光子さんを訪れたときのエピソードについては、『憲兵だった父の遺したもの』（倉橋 2002）のなかでも記されている。そこでは、上記の宋による記述とは異なり、「私の来訪の目的を伝えてもニコリともせず、父の写真を見ても関心がないようす。光子さんがずっと固い表情を崩さないの、私は冷や汗が出ました。けれどこれが当たり前ではないのか、『自分たちをひどい目にあわせた、日本の憲兵の娘が何をノコノコやってきたんだ』と、怒鳴られても仕方がないのだと覚悟しました」（倉橋 2002：160）とある。倉橋さんご本人に確認したところでは、倉橋さんが李さんと会ったときの状況は、訳注内の記述が事実であるという。本文中にあるような記述は、李さんが面会当時の様子を後に宋吉慶に語ったとき、あるいは東寧県内で聞きとり資料が収集されていく過程で編纂されていった可能性が考えられる。ここでは、宋吉慶の聞きとり時点での李さんの語りとして、宋の記述にしたがい訳出した。

13 ここでの李光子さんの心中についての記述は、宋吉慶の解釈によっている。

14 李さんが「許していない」とするのにも宋吉慶による解釈である。倉橋さんご自身の記述では、「しばらくして班さんのことを思い出したのか、彼女は初めてにっこりしました。光子さんの健康状態や生活ぶりを確認したあと、班さんがもう一度私のことを話すと彼女は大きくうなずきました。分かれる時に私は彼女と抱き合い、『どうかいつまでもお元気でいてください』としか言えませんでした。ここにも日本軍によって人生を屈辱的に変えられ、懸命に命をつないできた女性がいたので」（倉橋 2002：160）とある。訳注で、東寧県側での解釈と、倉橋さんご自身の記述の相違を比較的詳細に記しているのは、両者のギャップをとりたてて強調しようと意図しているためではない。第1節でも記したように、歴史解釈の枠組みが異なる二つの社会において、語りの文脈は異なってくる可能性が高い。本稿でこれらの語りの差異を拾い上げているのは、むしろ、こうした相違を乗り越えて、相互理解をめざすための交流が行われていることに着目するためである。

真が一枚と謝罪碑の写真が一枚あったようだという。

後日、蘇さんはわたしにこのコピーを見せてくれた。そこには、憲兵姿の大沢雄吉さんと謝罪碑の写真だけでなく、倉橋綾子さんの写真も含まれていた。写真の裏には二人分の住所が記されており、その一つが倉橋さんの住所と名前であった。こうして、あの『戦争罪責』のなかに登場する倉橋綾子さん本人に行き着いたのである。

2004年3月6日、わたしは失礼を顧みず、コピーに記された住所を頼りに倉橋さんにあてて日本への手紙を送った。

倉橋綾子さま

わたしは中国、黒龍江省東寧県文物管理所の宋吉慶というものです。仕事上の必要から、この数年、中国へ侵略した日本軍による中ソ国境地帯の要塞遺跡を調査研究しております。わたしは、日本の研究者である野田正彰氏の書いた『戦争罪責』という本のなかで、「父が残した紙片から」や「軌跡を追って」という文章を読み、あなたが以前、「小李」、「悲しみの河」という作品を発表されていることを知りました。以前日本軍の「慰安婦」であった李光子さん（東寧県在住）を訪れたとき、「あなたが2000年に調査のため東寧を訪れ、李さんの家にも立ち寄って、父親である大沢雄吉さんの代わりに彼女に謝罪した」といっていました。あなたの住所を知り、この手紙を書いております。失礼をお許してください。

野田氏の文章を読んであなたについて理解したことからいえば、あなたはひじょうに良識ある知識人であるだけでなく、またひじょうに善良で親孝行な娘であると思われる。あなたが取材して歩いた事績を見て、とても感動しました。かつて中日両国の人民に大きな被害をもたらした歴史をより多くの人びとに理解してもらうためにも、中日両国の人民の世代を超えた友好のためにも、またお父上の紙片にこめられた願いのためにもなると思います。あなたが現在ご存じの中国東寧におけるお父上の状況について、わたしたちにお知らせいただけませんか。またお父上が残された、あるいは戦争に関連した形見の品や、写真や資料などをコピーしてお送りください（たとえばあの紙片なども）。あなたの事績は、後の世代の教育にたいして、また戦争に反対し平和を愛することにたいして、ひじょうに積極的で重要な教材になると思われる。

あなたのお父上である大沢雄吉氏は、彼の平坦ではない生涯について、その命の尽きる最後に臨んで、良識によって沈黙を打ち破り、侵略戦争に参加したことについて、中国人民にむかって誠意をこめた謝罪をされたのです。このような精神は得難く貴い

15 倉橋さんによれば、このとき訪問したのは、李光子さん、李鳳雲さん、金淑蘭さんであり、池桂蘭さんには会っていないという。池さんの娘である蘇さんのところになぜ資料があったのかについては不明である。

ものです。

わたしたち東寧県内にある中国侵略日本軍による東寧要塞群遺跡は、1999年6月18日に対外開放されております。現在、戦争遺物陳列館を建設中であり、また2005年には世界反ファシスト抵抗戦争勝利60周年の学術シンポジウムを計画しております。ご都合がつくようでしたら、もう一度東寧に調査にいらしてください。またあわせてこの秋、我が県で行われる抗日戦争勝利60周年学術シンポジウムにご招待いたします。

宋吉慶

この特別な手紙は日本海を越えて運ばれ、すぐに倉橋綾子さんの手元に届けられた。一ヶ月後にわたしは彼女からの返事を受けとった。

宋吉慶先生

遙か遠く東寧からのあなたのお手紙を受けとり、感謝いたします。すでに李光子さんにお会いになられ、また野田正彰先生のご著書『戦争と罪責』お読みになり、わたしの個人的事柄に関心を寄せていただいたとのこと、心よりのお礼を申し上げます。

父、大沢雄吉が東寧にいったのは、憲兵としてであり、中国の人びとにたいして残酷きわまる犯罪行為を行ったのです。

わたしはその娘として、心からの謝罪をいたします。父が多くの中国の人民にもたらした大きな被害と悲しみについて、わたし自身、心の奥底からの思いをはせておりますが、この疚しさ、謝罪と謝りの気持ちについて表す言葉もありません。

わたしが班忠義先生とともに東寧を訪れたのは、2000年9月のことです。李光子さん、李鳳雲さん、金淑蘭さんのお宅をおたずねさせていただきました。

その後、石門子の郭慶士さん¹⁶に父の謝罪を伝えに行きました。この方には、そのお宅でお目にかかることができました。わたしにたいしてとても真摯で丁寧に対応していただきましたこと、この上もなく嬉しくまた感動いたしました。

このたびの東寧旅行や、また父の碑を建てましたこと、さらにわたし自身の戦争問題にたいする取材をとおして、あちこちで集めてきた資料を整理しまとめました。それを2002年に『憲兵だった父の遺したもの』として出版しました。日本語で書かれているため、宋先生はお読みになりにくいかもしれませんが、東寧への旅行にかんする記述は本書の151 - 170頁に記載されています。日本語の読める方をお探しいただければ問題ないと思います。

本書を宋先生に謹呈させていただきます。どうかお収めください。

16 「満洲国」当時、石門子日本軍慰安所の雑役夫していた男性。

そちらで開催されます 60 周年学術シンポジウムにご招待いただき、感謝いたします。日程が決まりましたら、お知らせください。心の準備いたしたく思います。

中国と日本の平和友好関係 60 周年記念の日を迎えて。

中日関係の平和が引き続き進展することを心よりお祈りいたします。

最後に、宋先生のご健康とご活躍をお祈りします。

それでは、

ありがとうございました。さようなら。

倉橋綾子

2004 年 4 月 2 日

3. 父の戦争体験を追って

大沢雄吉さんおよび倉橋綾子さんご自身はどのような人なのか。日本で『戦争と罪責』（野田 1998）が出された後、倉橋さんご自身も著書『憲兵だった父の遺したもの——父娘二代、心の傷を見つめる旅』（2002）を出版している。これらの記述を中心に、大沢雄吉さんの事跡とそれに対して倉橋さんが行ってきた取材調査の経緯を抜粋して紹介しよう。

倉橋綾子さんは、父親である大沢雄吉さんが日本へ帰国した翌年、1947 年に、群馬県の片田舎の農村で生まれた。彼女は戦後日本で誕生した世代であり、二人の兄はともに中国で生まれている。幼少期と少女時代は多くの家庭と同じように、父母とともに過ごした。彼女はひじょうに聡明でまた聞き分けのよい少女であり、家族のなかの衝突や齟齬を緩和させるうえで重要な役割を果たし、両親の期待に背くことはなかった。長じては、父親の愚痴を根気よく聞いてあげるようにもなった。早稲田大学文学部を卒業し、東京の中学で社会科教員として勤め、ずっと教学に従事してきた。教員をやめた後、「手をつなぐ戦後世代の会」、「ノーモア南京の会」、「中国人元『慰安婦』を支援する会」などに参加。また「日本民主主義文学会」の会員でもあり、「小李」、「悲しみの河」などの文章、『憲兵だった父の遺したもの』、『永い影』といった著作を著してきた。

倉橋さんが遺言となる紙片を受けとったのは、父親が亡くなる一週間ほど前のことであった。この出来事が起きる以前には、彼女は父親が戦争中どんなところに行っていたのか、何をしたのかについてまったく知らなかった。覚えているのは、最後に入院した後、父が戦争のことについて何か言おうとしていたことであるが、わずかな言葉だけで、はっきりしなかった。その先を話したそうでもあったが、すでに病状が許さず、その後昏睡状態におちいって、亡くなってしまったのである。

父が亡くなった後も、倉橋さんは夫とともに教員として働きながら二人の子どもを育てており、多忙な日々が続いていた。父親のことは心のなかで気にかかりながらも、なかなかゆっくりと考えている時間はなかった。そして教員をやめた後、比較的時間に余裕がで

きると、また父親のいう碑を建てることを考え始めたのである。しかし、碑を建てることは、伯父と兄から拒まれていた。彼らにとっては、家族の墓地のなかの碑にこのような言葉を刻むわけにはいかないのである。父のために碑を建立するということは、しばらく諦めた状態となった。

父はいったいどんな人だったのか。紙片に書かれた言葉からは、推測のしようがなかった。生涯、教育に携わってきたものとして、この歴史の真相を少しもわかっていないのだろうか。このことは、ますます倉橋さんを困惑させた。このときから、彼女は父を知るあらゆる人びとを訪ね歩くようになる。はじめに彼女は東京にいる伯父を訪問した。彼もまた憲兵として三年間、中国にいたことがある。倉橋さんを驚かせたのは、伯父もまた父の紙を受けとっていたことであった¹⁷。このときまで、倉橋さんは、病床で看護していた娘である自分だけに父はこの紙片を渡したのだと考えていたからである。実際には、伯父は兄と相談して、墓碑にはこの紙片の言葉を刻まないと決めていたのであった。

伯父への訪問と父親の履歴書から以下のようなことが理解された。父は1915年、群馬県の農村に生まれ、兄二人と妹一人がいた。父は高等小学校を卒業すると、中学に進学することはできず、家で農作業を手伝ったり、ときには土木作業に出たりしていた。18歳のとき志願して入隊し、3年後の1936年に憲兵になる試験に合格した。長兄は彼に先立ち近衛兵となっており、次兄も後に招集されて憲兵となり、3年間侵略戦争に参加している。

その後10年間に、あの紙片に書かれていたように、彼は前後して中国の華北と満洲国に憲兵として派遣された。1937年に天津に移動し憲兵に任じられたのを皮切りに、二年後には山西省臨汾の憲兵隊に移動、1942年には北平、1943年には満洲とソ連の境界地帯である東寧県石門子の憲兵分遣隊に派遣された。

1945年8月1日、大沢雄吉さんは東寧県石門子憲兵分遣隊から吉林省の琿春憲兵隊へ異動している。8月15日昭和天皇が降服を宣言し、8月18日には琿春でソ連軍に捕らえられた。武装解除の後、朝鮮の富寧に移送された。このなかで彼は歩兵を装い脱走しようとしたが、発覚して捕まえられ、八路軍に引き渡された。吉林省の敦化では土木工事の手伝いをさせられたが、機をみて脱走し、1946年8月に吉林市まででた。それから1946年10月に遼寧省の葫蘆島からの引揚げに混じって、日本の博多に帰つた。およそ1年間の逃亡生活であった。

彼は中国にいるとき、従軍看護婦であった母と結婚し、倉橋さんの長兄が生まれた。1945年7月末、憲兵隊で妻子を帰国させる指示が出たため、母と兄を日本に送り返している。

17 『憲兵だった父の遺したもの』によると、伯父と兄も紙片を受け取っていたことが、後に判明している（倉橋 2002：11）。

東寧県におけるわれわれの調査によれば、当時石門子村に駐留していた日本軍は、第108歩兵連隊と第369砲兵連隊、さらに第1013重砲連隊および憲兵分遣隊であった。村の西側の斜面には4つの従軍慰安所があった。われわれが現在調査している4名の「慰安婦」被害者たちはみなこの石門子慰安所にいたものたちである。当時の憲兵隊の士官宿舎では、現在でも当地の農民たちが生活している。われわれは、当時倉橋綾子さんの両親と兄はここで暮らしていたと推測している。

戦後群馬県に戻った父親は、その両親の家の傍らに小さな家を見て、呉服の商売を始めた。彼は気難しい、人にも自分にも厳しい人であった。彼は戦争を憎み嫌っており、昭和天皇を厳しく非難する気持ちをあらわすこともあった。いっぼうで軍人恩給連盟にも加入しており、恩給増額のために奔走した。また中曽根康弘の後援会にも軍人恩給のことで参加している。後になって肝硬変となり、入退院を繰り返した。1986年に死去。

このことは、父がいっぼうでは職業軍人としてあの戦争に参加したことを悔い、「強制された戦争」を憎み、日本国民に侵略戦争を強いた昭和天皇を憎悪していること、そのいっぼうで自分はその責を負ってはいないことを示している。

「父は戦争に巻き込まれ、ずっとそれを後悔し、戦争を批判していた」

倉橋さんが伯父のところでは聞いたのは、敗戦後の父の逃避行の話であり、戦争中彼らが何をしていたのかについてはほとんど分からなかった。

後に中国帰還者連絡会という会を知り、そこを訪れる。またかつて憲兵であった方に手紙を書いたり、防衛庁防衛研究所の図書館で資料の閲覧を行ったりする。

こうした努力にもかかわらず、父親について何の手がかりもないことが、彼女をひどく焦らせた。後に、偶然ある老婦人のもとから『憲友会名簿』を借り受け、一ページ一ページめくってみた。名簿に記載されていたのは、敗戦時に3万6千人いた憲兵のうち1万7千人の会員の氏名、住所、さらに最初の勤務地と敗戦時の部隊名であった。そのなかから敗戦時に父親が所属していた満洲の東寧憲兵隊、および琿春の憲兵隊にいた人びとを選びだし、順番に電話してみることにした。こうした人びとの多くはすでに高齢であり、亡くなったり、病床にあって電話を受けられないものもある。そのためしばらくのあいだ父の状況を知っている人は捜しあてられなかった。およそ25人ほどと連絡を取ったとき、当時東寧の憲兵分遣隊にいたことのある同僚が二人判明した。一人は石門子の憲兵分遣隊長で、名古屋の近くに住んでいた。

倉橋さんはすぐさまこの老人に手紙を書いた。なかには、父の残した紙片のこと、自分の父親が中国で憲兵をしていたときの状況について知りたいと思っていること、さらにお話を聞きにうかがいたいと思っている旨記した。

この老夫婦は、かつての部下の娘が遠路はるばるやってきたことをひじょうに喜び、ひ

じょうに懐かしそうに大沢雄吉さんと過ごした一年半の生活について交互に語りだした。このときのシーンを『憲兵だった父の遺したもの』（倉橋 2002）から引用してみよう。

「石門子は山また山の連なるところで、5月半ばから8月まで鈴蘭などの花が一斉に咲き、それはみごとでした。そして秋などなくて一気に冬になってしまうんです。トイレなどなくて凍らせたままで、雪解け前に鉄棒でたたき割り畑へ持って行って埋めるのです。内地では食べ物がなくても満州の官舎では豊かで、酒保で何でも手に入りました」

「そうだ。昭和20年の正月には皆で神社にお参りに行き、私が祝詞をあげた。元日はうちで皆さんに来てもらいお祝いし、二日は隣のあなたのお父さんの所にまた集まって、祝ったのを覚えているよ。鯛の尾頭付きだってあったんだから、大したものだった」

（中略）

ソ連軍が入って来て隊長はシベリアへ抑留されるはずだったが、南方で患ったマラリヤが再発していたため、牡丹江で見捨てられたそうです。そしてその病院で知り合いの医者と再会し、助かって、やがて帰国できたとのこと。一方奥さんのほうは（中略）、ソ連兵が怖いので頭を坊主にして、日本人の洋装店に住み込むことができたそうです。一年後に博多に引き揚げてきたが、栄養失調がもとで肋膜炎を病んだとのことでした。

（中略）

私は隊長夫妻の話の一つ一つなずきながら聞きました。けれど手紙で尋ねたことは出てきません。石門子ではどんな事件や作戦があったのか、触れようとしません。やがて息子さん夫婦が心づくしの夕食を運んでくれ、おいしくいただきました。

そのあとの話にも父のことは出ません。私は「なにか石門子で父のやったことはなかったですか」と聞きましたが、「いやあそこは国境だから、大したことはありませんでしたよ」ということで、すぐ話が移ってしまいました。

そして、奥さんがわざわざこしらえておいてくれた布団で一夜をすごしましたが、翌朝の別れはさすがに胸にこたえました。おそらく再び会うことはあるまい、互いにそんな気持ちでした（倉橋 2002：36-38）。

もう一人の同僚は青森県に在住であった。手紙を差し上げると、すでに病床に伏しているとのことで、奥様が返事をくださった。それによると、「大沢雄吉さんは温厚な人でやさしかった。一緒に近くの沼へ泳ぎにいったことがある」という思い出くらいしか得られなかった。

父の戦争参加にかんしての取材は、このように一つずつ積み重ねられていったが、収穫

のない取材を重ねるにつれて、倉橋さんはさらに重く重い考えに沈んでいった。考えてみるとこうした事情はひじょうに重大であり、ただ父一人の問題ではないのである。現在からみて、父が幾つかのあまり名誉ではないことを行ってきたことは確かである。それを娘にたいして言い出しかねたことは、理解できる。けれども、なぜこれほど多くの人びとが戦後連絡を取り合うこともなく、また黙して語らないのか。なぜ近代史の教科書を含めた日本の資料のなかに、侵略戦争の具体的記述を見つけないことができるのか。社会科の教員として教育に携わってきた倉橋さんにとっては、ここには何か不可解な、明るみには出せないような事柄があるように感じられた。倉橋さんは、できれば中国まで行ってみたいと考えるようになった。

4. 戦争体験の受入れをめぐって——良識と正義の呼び声

『戦争罪責』における分析では、父が亡くなって7年後の1993年、倉橋さんが書いた第一の作品である「小李」と、その4年後1997年に書かれた二番目の小説「悲しみの河」とのあいだにみられる差異をとりあげている。これらの作品は、父の戦争参加についての取材をとおして考えたことが映し出されていると考えられる。第一の小説のなかでは、訪問した先の老人は父の過去について回想し、そこでは一人の優しい父親が、その善良さと弱さから戦争に巻き込まれ、終生その罪責感を心の奥底にしまっていたという物語が描写される。けれども野田教授の分析では、この物語は、かならずしも人間の真実を充分に表現するものではないと考察されている（野田 1998：314-315）。

4年後に発表された第二の小説「悲しみの河」では、これとは異なる父親像が描かれる¹⁸。ここでのシーンを『戦争と罪責』（野田 1998：315-316）から引いてみたい。

第二作では、末期の父を看病する娘の所へ、匿名の手紙が届く。なかには、中国人の首を斬って笑っている三人の日本軍人の写真が入っていた。中央の男は、若い日の父である。

娘は苦しみぬいて、病床の父にやっと聞く。

「お父さん、本当のこと教えて。私大丈夫だから、何があっても私はあなたの娘なんだから。大勢の人を手にかけてしまったのは本当のこと？」

父のまぶたから涙が一筋。だが、黙ったまま顔をそむけてしまう。

ところが暫くして、帰り支度をはじめた娘に、父は筆談で任地と殺した男女の数を伝える。絶句して、「どうしてこんなひどい事をやれたの」と聞く娘に、父は再び震え

18 「悲しみの河」の本文が入手できなかったため、ここでの引用の訳文は、野田（1998）に準じている。

る鉛筆で答える。

「我々は軍人で、これは聖戦だ。それで国中が一つにまとまっていた」

「初めは悩んだ。だが支那に勝つのだと割り切るようになった」

「俺は俺でいられなかった。実に済まない事をした」¹⁹

娘は父親の耳元でささやく。「お父さん、ありがとう。辛い思いをさせてごめんね。でも、よかった。隠さないでいてくれたことが。お父さんも少しはほっとしたでしょ」

「私、引き受ける。お父さんのやったこと引き受けるから」

倉橋さんは、野田正彰教授のインタビューを受けたさいに、「なぜあなたはお父さんが生きていた時に、聞こうとしなかったのですか」（倉橋 2002：40-41）と尋ねられ、絶句したことがあるという。しかし、この二つの小説の分析をとおし、野田教授は、「父が死んでから10年、倉橋綾子さんはようやく亡き父に聞くことができた」（野田 1998：316）という。「悲しみの河」という小説を記したことにより、倉橋さんは、たとえ小説のなかであるとしても、一人の人間として父の言葉に耳を傾ける力を手に入れたのである。

野田教授の分析では、この小説で、父にとって「強制された戦争」が「自分が携わった戦争」へと変換されているという²⁰。このことは、父が行為者として判断を下していること、行為の責任を負う人として謝罪していることを示している（野田 1998：316）。父の家業を継いだ兄が亡くなった後、倉橋さんと兄の息子は、ついに大沢雄吉さんの遺言を碑に刻み、彼の墓の傍らに建てた。父の遺志をついにまっとうしたのである。

父の遺志は達成したものの、ことの真相は倉橋さんの心に重くのしかかっていた。彼女は中国の旅に出かけることを決めた。

倉橋綾子さんは何度も中国を訪れ、南京の大虐殺遇難同胞記念館や、北京の抗日戦争記念館、哈爾濱の「七三一」罪証陳列館へおもむき、また海拉爾要塞や東寧要塞などの地域を視察している。

2000年9月には東寧を訪れ、「慰安婦」被害者である道河鎮にいる李鳳雲さん、三岔口にいる李光子さん、東寧鎮にいる金淑蘭さんを訪問している。父親の大沢雄吉さんが駐留した石門子では、当時、石門子慰安所で雑役夫をしていた郭慶士さんを訪問し、石門子の日本軍士官宿舎の跡地や大肚川憲兵隊跡地を尋ねている。彼女の父親を知る人を探し出すことはできなかった。しかし、彼女の幾度かの中国来訪で見聞きしたものは、彼女に深い

19 中国語訳『戦争罪責』を参考に書かれた引用では、ここの表現のニュアンスが若干異なっている。日本語に訳出すれば、「あのとき、ほんとうの自分自身はもう無くなってしまっていた。まるで機械にでもなったようだった。ほんとうに悪いことをやり尽くした」となるが、ここでは『戦争と罪責』の文章にしたがっておく。

20 『戦争と罪責』の原文では、「『させられた戦争』から『した戦争』」と表現されている（野田 1998：316）。

印象を残した。「慰安婦」被害者の被った悲惨な境遇や精神的な傷を目の当たりにした。陳列館におかれた戦争の遺品の一つ一つや、あるいはまた中国侵略日本軍が中国国内に残した要塞、兵舎、トーチカなどの旧跡が、当時の日本軍のあらゆる行為を、さらには中国の人びとが侵略者に抵抗するために払った代価を、彼女に証明していた。

2002年、彼女は父に紙片を渡されてから、多くの人や場所を尋ね歩き、また中国で見聞きしたこと、感じ取ったことを20万字にまとめ、『憲兵だった父の遺したもの』として出版した。

彼女はその序文で、次のように書く。

大切な人を失った悲しみは、時とともにうすらぎ忘れ去っていくものなのでしょうが、私の場合は父の遺言がその後の人生に深く入り込み、忘れるどころか思いは逆に強くなっています。

「中国人民に対しなしたる行為は申し訳なくひたすらお詫び申し上げます」

この言葉から目をそらすことができないのです（倉橋 2002：2）

東寧への旅を終え、いま私はハードルをひとつ越えたように感じています（倉橋 2002：3）

2005年、倉橋綾子さんは、東寧県人民政府の招きにより夫と通訳とともに「中国・東寧世界反ファシスト抵抗戦争勝利60周年記念および東寧要塞シンポジウム」に参加した。会議の席上、彼女はこの数年間、艱難のなか力を尽くし戦争問題の訪問調査を行ってきたこと、さらに調査をとおして自らの思想のなかに変化が生じたこと、またこの思想上の変化について、文学作品をとおして世間の人びとにたいし平和を愛する呼びかけを行ってきたことを、一つ一つ報告していった。そうして中国および外国の専門家や新聞記者にたいして、父親が中国で行ってきたことを、もう一度、謝罪したのである。会議の参加者たちからは、熱烈な拍手と深い畏敬の念が示された。会議の期間中には、東寧県文物管理所で行われた「東方のマジノライン——中国侵略日本軍偽滿洲国国境要塞 写真展覧」を見学し、中国侵略日本軍東寧要塞群遺跡を視察、また東寧要塞歴史陳列館や東寧の対ロシア税関を見学した。

会議終了後には、父親が駐留した石門子日本軍兵舎跡地を視察した。しかし残念なことに、当時の歴史の証人であった郭慶士さんはすでになくなっていた。その後、彼女は前回たずねた李光子さんにもう一度お会いしたいと申し出たが、わたしは、李光子さんもまたすでになくなったと告げざるを得なかった²¹。

21 倉橋さんの目から見たこのときの旅の様子は、ご自身の著書『永い影』（2005）に記されている。

倉橋さんは、「時の流れとはほんとうに無情です。もし前回彼女たちにお会いして、父の謝罪を伝えることができなければ、もう間に合わなかったのですね」と述べた。

帰国後、倉橋さんはすぐに中国の旅についてまとめた文章を含めて、新しい作品『永い影』（倉橋 2005）を出版した。本が出版されるとすぐわたしのもとに届いたが、その手紙の中には、「日本の小泉首相はいまだに靖国神社参拝を続けており、まったく反省の様子はありませぬ。きっと中国の人びとの怒りをかうことでしょう。わたしはいたたまれない気持ちです」とあった。

わたしたちは、日本政府も、大沢雄吉さんや倉橋綾子さんの父娘のように、歴史を正しく見つめ、被害国の人びとに与えた多くの被害を認め、深く反省謝罪して、これ以上被害国の人びとの感情を傷つけるようなことがないことを心から願っている。ドイツのように、世界中の平和を愛する人びとの理解を勝ち取るよう、わたしたちが永久に平和という太陽の恩恵を受け、中日両国の何代にもわたる虹の架け橋となれるよう願っている。

謝辞・注記

本文を担当する宋吉慶の記述と、文中での登場人物である倉橋綾子さんご自身が書かれた記録と若干ニュアンスが異なる場合がある。上段までの本文自体は宋吉慶の執筆によっているが、翻訳の段階で比較的详细に異同にかんする訳注を入れている（その目的については訳注14を参照）。また本稿が完成した時点で、倉橋綾子さん自身にもご確認の労をとっていただいた。ここであらためて、心よりの感謝を申し上げたい（坂部晶子）。

参 考 文 献

（宋担当部分）

・中国語

野田正彰（朱春立・劉燕訳）、2000、『戦争罪責——一個日本学者關於侵華戦争士兵的社会調査』、広西師範大学出版社。

・日本語

倉橋綾子、2002、『憲兵だった父の遺したもの——父娘二代、心の傷を見つめる旅』、高文研。

（坂部担当部分）

・日本語

伊香俊哉、2003、「雲南滇西地区における戦争の記憶」、都留文科大学比較文化学科編、『記憶の比較文化論——戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』、柏書房。

菊池実・関東軍国境要塞遺跡研究会編、2001、『ソ満国境関東軍国境要塞遺跡群の研究』、六一書房。

倉橋綾子、2002、『憲兵だった父の遺したもの——父娘二代、心の傷を見つめる旅』、高文研。

——、2003、「『戦後世代の会』から『山猫くらぶ』へ」、『月刊社会教育』574号、12-18頁。

——、2005、『永い影』、本の泉社。

——、2007a、「私たちをつかんで離さない『過去』——『蓋山西とその姉妹たち』から見えてく

- るもの』、『世界』765号、84-92頁。
- 、2007b、「憲兵だった父の謝罪の碑」、『月刊ゆたかなくらし』305号、36-40頁。
- 松田素二、1996、「変奏する二つの記憶——韓国人元三菱徴用工被爆者の戦争の語り」、『インパクション』99号、54-63頁。
- 野田正彰、1998、『戦争と罪責』、岩波書店。
- 、2001、「北京での討論会に参加して」、『中国研究月報』644号、9-13頁。
- 坂部晶子、1999、「『満洲』経験の歴史社会学的考察——『満洲』同窓会の事例をとおして」、『京都社会学年報』7号、101-120頁。
- 、2007、「『満洲勞工』の記憶——黒龍江省東寧県における聞きとり実践」、山本有造編、『「満洲」——記憶と歴史』、京都大学学術出版会。
- 、2008、『「満洲」経験の社会学——植民地の記憶のかたち』、世界思想社。
- 孫歌、2002、『アジアを語ることのジレンマ——知の共同空間を求めて』、岩波書店。
- 宇野重昭、2007、『北東アジア学への道——講義「北東アジア研究総論」から』、ナガサコ印刷。
- ヨネヤマ・リサ、1996、「記憶の弁証法——広島」、『思想』866号、5-29頁。

・中国語

- 高曉燕（主編）、王敬栄・韓茂才・宋吉慶（副主編）、2002、『東寧要塞』、黒龍江人民出版社。
- 宋吉慶・卒玉芬・孫芹、2005、『東寧要塞陣地群（上）』、黒龍江人民出版社。
- 張鳳鳴・王敬栄（主編）、2000、『残害勞工』、黒龍江人民出版社。

(SONG Jiqing)
(SAKABE Shoko)